慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大文字祭礼の都市人類学的研究 : 左大文字を中心として
Sub Title	
Author	和崎, 春日(Wazaki, Haruka)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1994
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.40 (1994.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000040-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

		倣による多音節タクトの習得
第 795 号	水野　圭郎	系列反応時間課題におけるRSI 効果　―潜在的学習の行動分析学的研究―

教育学修士（教育学専攻のもの）

第 796 号	杉下　文子	アンリ・ワロンの教育思想―年代記的研究の試み―
第 797 号	遠藤眞理子	多文化教育における文化的リテラシー　―多様性から生まれる統一を求めて―
第 798 号	坂下　浩一	統合教育が児童の態度に及ぼす影響：PM リーダーシップ理論からのアプローチ
第 799 号	須々木真紀子	不登校の子どもの保健室登校に関する調査研究
第 800 号	福田　哲也	行動記憶と痴呆：認知・発達心理学的理論化と検査の開発
第 801 号	三神　淳子	F. W. パーカーの子ども観に関する一考察

博　士（平成 5 年度）

社会学博士

乙　第 2663 号　和　崎　春　日

大文字祭礼の都市人類学的研究
―左大文字を中心として―

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学文学部教授　大学院社会学研究科委員　文学博士　宮家　準

副査　慶應義塾大学法学部教授　大学院社会学研究科委員　社会学博士　川合　隆男

副査　慶應義塾大学名誉教授　社会学博士　十時　厳周

〔学力確認担当者〕

慶應義塾大学法学部教授　大学院社会学研究科委員　社会学博士　川合　隆男

内 容 の 要 旨

本論は，文化人類学がこれまで得意とし，考察を蓄積してきた単層社会や未開社会の研究ではなく，国家などともに複合社会（complex society）と規定されている都市を対象とした文化人類学的研究を拓こうとするものである。その際，都市人類学は，人類学と名のる以上，文化人類学の視点から都市を捉えようとする。筆者が都市人類学を標榜する上で採る方法は，都市民衆の生活や習俗や価値意識や心意から都市社会を分析するところにある。本論は，都市に生きる民衆の習慣や民俗，そうした習俗のぶつかり合い，緊張，妥協，協力などの社会関係，さらには，それを支える都市生活者の生き方，工夫，生活の知恵などを析出したものである。

その意味から，京都・大文字五山送り火の都市の祭りという，都市民衆の社会生活と心意・アイデンティティの両方が反映する対象を取り上げたことに，方法論上の意義と適切さがあるだろう。したがって，本論で示した筆者の都市人類学というものは，部分から全体を見据え，生活領域や価値意識から都市を語り，下の生活実践から上の都市構造を見上げて，都市性を考察したものである。

本論では，大きく 3 部に分けて，都市祭礼・大文字五山送り火を，その一つの左大文字に焦点をあてて，考察した。第 1 部では主に，大文字祭礼の現在の共時的システムを考察した。第 2 部では，祭礼をめぐる通時的・歴史的な社会変動を分析した。第 3 部では，大文字をめぐる共時・通時分析を受けて，筆者の都市人類学理論を整理して提示し，この理論的枠組にそって，共同体論，都市民族論，アソシェーション論，集団境界論，儀礼構造論，都市祭礼の研究調査方法へと，展開したものである。

まず，序章において，京都・大文字五山送り火祭礼の歴史と由緒を追跡した。江戸初期・中期頃からの盆儀礼であることは判明するが，寺院・神社・宮中の文書から，大文字に関わる記載が出てこない。つまり，大文字はそれだけ民衆主体の町衆的エネルギーの集積から成っていたこと，そして，市民的な自由な興趣の競い合いへと展開していたことを指摘した。こうして，起源論的に

も大文字祭礼が市民行事であることをまず指摘した。

第1部の共時的分析では（第1—7章），大文字祭礼をヤコブソンやマルチネの説く記号論の枠組で分析し，メッセージの送り手集団（左大文字保存会・尼講・不動講 etc. の祭祀組織），送り手を補強する者（行政機関・観光業者），受け手1（信仰的参加者），受け手2（祝祭・観光的参加者，見物人）に整理した。これは，大文字祭礼に関わる多様な参加者の構造人類学的理解にあたるが，この枠組的理解を超える為に，都市社会の中に生きている地域的・個別的記述を重視した。さらに，この構造モデルに時間軸を導入して，大文字の通時的な変動・動態モデルとして示したところに筆者のオリジナリティーがあると考えている。

上の構造的枠組は，一応の整理としつつ，そこから都市生活者の生活のヒダや心意のあり方を，微細に吸い上げて，都市の民衆習俗を明かにする必要がある。そこで，第2—4章で，メッセージの送り手である左大文字の3つの祭祀集団，つまり左大文字保存会，不動講，尼講（観音講）のそれぞれについて，その行事・民俗・活動など詳しく考察した。また，第5—6章で，メッセージの受け手とされる市民や旅人（観光客）の祭り参加の様態を詳細に記述・分析した。そして第7章では，「送り手を支える者」と位置づけた都市行政の，大文字祭礼への取り組みを，入手した多くの資料で説明した。こうして，単なる講造論だけではない，また微視的すぎる意味世界論だけでもない，構造論と生活世界論の両者をともに意味あるものにする記述・分析を行ったのである。

ここで，記号論的に「演ずる者」「支える者」「祈る者」「見る者」というように祭りの役割分担にそって配置された人々だが，その役割が固定しているのではない。また自らの世界が閉じて独立独歩に「自分があるからある」というようには，成立しない。「演者」としてあげた左大文字保存会は，市長表彰という現代権威や市民信仰を取り込んだ形で，自らの儀礼を組織している。不動講は，旧「京」文化との対抗・協調関係のなかに生きて，他文化との社会関係に生かされている。観音講の左大文字儀礼は，都市全体の信仰を取り込み，また，自らアーバン・コスモロジーを作り上げる，という相互関係の中に存在している。「演者」の左大文字は，「見る者」「祈る者」を取り込んで成立している。

一方，「見る者」「祈る者」の左大文字はというと（第5—6章），これがただメッセージの受け手だというに留まらない。自らの大文字祭礼を多様に創り上げる。つまり筆者は，都市祭礼・大文字が「演者」と「見る者・祈る者」の間の「取り込みと便乗」の相互関係によって支えられていることを，論証した。柳田国男の「見る者」「演る者」という2者間規定の祭礼論から一歩進めて，「取り込みと便乗」という概念を用いて都市祭礼相乗性を析出した所に独自性がある。

第2部は，左大文字の社会変動論，文化変容論を扱った諸章（第8—11章）である。左大文字集団をとり巻く物理的環境の変化（アーバン・フリンジから市街地中心へ）に伴って，新住民の大量流入による旧住民の相対的マイノリティ化，新しい都市経済の発展と職業構成の変換，原風景の喪失・変化などの変容過程が生じる事を丹念に追跡した。特に，地元集団の社会構造の変動を，かれらのシンルイ関係に求めた。ここで筆者は，地元集団の姻戚関係の変動を，地元の主要22家系の江戸末期から今日にいたるまでの6世代に亘るシンルイ関係として分析し，共時的にはかれらの原風景としての循環的シンルイ構造を抽出し，通時的には内的循環系から外的拡散系へと変化をとげていることを，実証的に論証した。

これに伴って，左大文字集団に内からも外からも集団崩壊の危機が迫り，この他者と不断に交わる複合的状況から，自己・自文化を積極的に読み取り再評価する「土着主義的運動」や反文化変容が起こって来た。内的シンルイ体系をよしとする言説を抽出し，地元民たちが，社会・経済状況の変動のなかで，ただ一つ連続性の高かった宗教生活にかけ，大祭礼・左大文字を運命をかけたシンボルとして，集団統合をはかっていこうとする動態を析出した。さらに，筆者は，圧倒的多数の新住民に取り囲まれた地元民たちが，旧地元を内として，天皇伝承を内に引きつけるなど，様々な内集団評価の聖俗論を生みだしている文化動態を，分析した。こうして筆者は，脱フォーク的な都市経済の勢いが逆に都市的閉鎖性をも生成するということを示し，構造主義的理解から一歩すすんで，「動態的二項対立論」と「意味生成の社会変動論」として示したのである。（第11章）

こうした内部構造の崩壊・変化の時期は，昭和35年—40年の頃で，この頃，日本の高度経済成長のもとに，各都市が膨張・発展した時期である。こうした流れの中で，左大文字集団の回りにも大量の新住民が来住し，これが地元民にとって，異なる生活様式の外圧と感じられると同時に，新しい都市経済や観光経済の息吹が不安とともに感じられる時期であった。筆者は，こうした時代背景に随伴した，左大文字集団の儀礼様式の高次の再編過程と拡大過程を分析し，新しい都市伝統の構造過程を析出した。こうして，「筆者は，祭りの高度経済成長史」

を社会組織論と儀礼民俗論の両方を結びつける形で，詳細に考察したのである。

第3部（第12章—結章）において，筆者は，都市人類学の様々な考え方を整理し，レッドフィールドに代表される，習俗が抜け落ちることによって都市社会が現れるとする，de—モデルの「脱フォーク性としての都市」と，オスカー・ルイスに代表される，都市でかえって習俗性が強調される，re—モデルの「再フォーク性としての都市」という筆者の分類を示した。そして，今までのこの2つの都市人類学の流れとはちがって，筆者は，「脱フォーク」と「再フォーク」が都市の中で同時に生起しており，一方と他方がせめぎ合う動態と一方と他方が互いに自らを創りあう動態の両方を示した。そうして，「脱フォーク再フォーク拮抗・併存過程としての都市」という都市人類学上の新たな理論枠組を提示した。

これによって，左大文字の儀礼過程を再度見なおすなかにも，「脱—再フォーク」の拮抗・併存過程を抽出した。さらに，ここで，都市祭礼に宗教性・伝統性・祝祭観光性の3レベルが併存して，都市社会でのアイデンティティーが多元的に成立しうる事を論じた。そして人々の結びつきとしては，シェーラーの論をひきつつ，自己意識化のフィルターを通る共同体と，これを感性的に超える共同体があることを論じた。こうして，都市祭礼に，様々な相が，特に「開放系とエッセンス維持」の同時存在が可能となることを論証した。

第15章では，市民的行事に開いていく大文字をめぐって，都市民俗（re モデル）と都市風俗（de モデル）が，これも「取り込みと便乗」の相乗作用によって，互いを活かし合い，大文字を軸に民俗が多様に広がりを見せることを示した。これによって，今日までの都市民俗学「伝承母胎論」と「残存＝原型遡及」に比重をおきすぎてきたことを批判的に検討し，「生成過程の都市民俗」「創造過程にある都市伝統」の概念を呈示した。

第16章は，この民俗の外延的拡大を，組織論レベルで検証した章である。民俗の現代的発展にしたがって，祭りに多様な組織が絡つき，アソシェーションの派生的・外延的拡大の結びつきが出現することを論証した。そして筆者は，これを，ギストのクラブ複合の概念に対比させる形で，「都市祭礼のアソシェーション複合」という新しい理論枠組を提示して，適応メカニズム論を超える，文化構造の都市人類学を提唱した。その時に見られる，祭祀組織の融通性から境界論として発展させ，ゴッフマンの境界論と重ねて，都市社会における出会いの認識論としてまとめた。これが第17章である。

上のような議論を，都市祭礼の儀礼構造論と研究調査方法論として結論づけたのが，第18章と結章である。ここでは，特に，「都市祭礼の多層構造」をアイデンティティーの多元性に絡めて，人間の自由の問題としても考察した。都市祭礼の弁証法や都市祭礼のコード・リバーサルという新概念の提示も試みた。また今日までの都市祭礼の調査方法が「広さ」の平面的な把握に比重があったのを批判的に考察し，都市社会にある「広さ」と「深さ」つまり広域性・多人口性と，個人や地域の心意・歴史との両方を析出する方法として，祭祀集団の「深さ」に注目し，それと他集団との関係から「広さ」を描いていくという複合的歩方法を，提唱した。

こうして，総じて，都市祭礼の分析から，相似と相異，差異化と一体化，自己主張と自他共同などの，両者の拮抗・相互生成という，都市構造の動態的理解のモデルを示したところに，筆者のオリジナリティーがあると考えている。また，研究調査方法論としても，研究者（筆者）をも祭り参加者として描いていく，主客の相互的な科学認識論を提示したことになると考えている。

論文審査の要旨

本論文は京都の左大文字送り火行事を都市人類学の視点から調査分析し，これをもとに都市祭礼論，都市人類学の理論構築をめざしたものである。その構成は次の三部，20章からなっている。

序　章　大文字五山送り火の位置付けと都市人類学

第一部　共時的分析

第1章　大文字祭礼の記号論的分析

第2章　左大文字保存会の左大文字——通過儀礼と社会化

第3章　北山金閣寺不動講の左大文字

第4章　北山観音講の左大文字——左大文字における北山尼講の民俗と都市祭礼の複合性

第5章　市民・旅人の左大文字——大文字信仰の内容分析

第6章　市民・旅人からの主体的参加と祭礼組織からの「取り込み」

第7章　都市行政から見た民俗行事——大文字をめぐる市民・旅人の参加の受け皿づくり

第二部　通時的分析

第8章　左大文字祭礼組織の歴史学——祭りの高度経済成長史

第9章　左大文字における伝統と変化——その儀礼様式と祭礼集団をめぐって

第10章　左大文字地域における社会変動と反文化変容――シンルイ構造・呼称・伝統行事との関連

第11章　左大文字の聖俗論との歴史的意味生成

第三部　通・時共時分析と理論的展開

第12章　都市人類学理論と都市祭礼研究――地域人類学とエスニシティの視角

第13章　共同態論と都市祭礼――大文字五山送り火における地域共同態と都市共同態

第14章　閉じる都市民俗と開く都市民俗――大文字五山送り火における都市民俗の両極性

第15章　都市民俗学と都市祭礼――都市の民俗生成

第16章　アソシェーション論と都市祭礼――適応メカニズム論を超える都市人類学

第17章　都市民俗の動態性とボランタリー・アソシェーションの可塑性

第18章　都市祭礼の儀礼構造論

結　章　都市祭礼の研究方法

左大文字送り火は毎年8月16日夜，京都市北区の大文字山（大北山）山腹に設けられた大の字を形どった火床に松の割木，護摩木，水塔婆を組みあげて燃やす行事である。一般にはこれは盆に迎えた祖霊を送る儀礼に淵源を持つとされている。京都ではこの折り，東山如意獄の「大」，万灯籠山の「妙」と大黒天山の「法」，この「左大字文」，舟山の「舟」，曼荼羅山の「鳥居」の五つに火が点じられ，これを五山送り火と総称している。その始まりは必ずしも定かでないが，室町時代末頃に町衆の間で東山の大文字が始まり，江戸時代初期に現在の五山送り火の形態が整ったとされている。

著者はこの五山送り火を典型的な都市祭礼ととらえ，主として左大文字送り火を通じて都市人類学を構築すべく20余年にわたって調査研究を進め，その成果を本論文に結実させた。本論文は，まず序章で今後文化人類学はただ単に未開社会や単層社会の研究に留まるべきでなく，現代社会とくに都市に目をむけるべきであるとする。その際都市人類学は都市住民の生活を通じて社会関係，民俗，価値意識，コスモロジーを解明することをめざし，その為にはこれらが最もリアルに顕在化する都市祭礼をとりあげるのが望ましいと考えて，左大文字送り火を研究対象としたとする。

第一部　共時的分析では，まず左大文字送り火が8月10日頃の大北山地域の檀那寺法音寺の灯籠あげなどの迎え盆，15日の左大文字保存会や金閣寺不動講の松の割木・水塔婆・護摩大志納所の設置，16日午前中の松の割木，水塔婆，護摩木の寄付とこれらの山上への運搬，午後の火床の設置，夕方の法音寺での施餓鬼法要，保存会員の火床迄の親火松明を中心とした松明行列，午後8時15分の点火，終了し下山後の法音寺での北山尼講による御詠歌という順序で行われることを紹介する。そしてこの左大文字送り火を聖なるメッセージととらえるとの視点にたって，その構成要素として，メッセージの送り手である行事実施者（左大文字保存会，北山金閣寺不動講協心組・北山尼講）と送り手を支える行政当局・観光業者，受け手である信仰参加者（祈る者）・見物人を抽出する（第1章）。

メッセージの送り手の中核をなす左大文字保存会の成員は，大北山地域の中心衣笠地区土着の22家とそのシンルイの人である。これらの家の子供は13歳になると保存会に準会員として加入し，行事の手伝いをしながら技術を習得し，3年後に会員となる（第2章）。そして60歳位迄つとめると，金閣寺不動講協心組に加入する。この講は金閣寺境内の不動堂の石造不動明王を崇拝対象とする大峰登拝講で，左大文字送り火にあわせて8月16日にこの石造不動明王を開帳し，山上で焚く護摩木や水塔婆を集めている（第3章）。北山尼護は衣笠地区の老婆の観音講で毎年11月に法音寺観音堂で西国三十三箇所の御詠歌を詠ずるが，特に左大文字送り火の夜は十三佛の軸をかけて金閣寺不動・愛宕・鞍馬や近くの地蔵などの御詠歌を詠じている（第4章）。

なお行政側では京都市文化財保護課，同観光協会，同文化観光資源保護財団，警察，消防などがこの行事を支援している。ちなみに長年にわたって五山送り火に尽力した者が毎年各山の保存会から1人か2人市長から表彰されているが，左大文字ではこの表彰者が大松明を保持して松明行列の中心を進んでいる（第7章）。一方受け手のうち信仰者は護摩木に願事を記し，水塔婆に先祖供養の旨を記している。見物人もこれに便乗して，なかば遊び的な感覚で護摩木に願事を記している（第5章）。左大文字に点火する保存会の人々も火床をふやすなどして彼らの要求をとり込んでいる。さらにコマーシャリズムもこの行事に便乗して利益をはかっている（第6章）。

第二部　通時的分析では左大文字送り火をその歴史，親族組織，儀礼，コスモロジーなどについて分析している。この大北山地域は昭和35年以降急激な移住人口の増加により，市街地化した。そして新住民もこの行事に参加することを希望するようになった。これに対して保存会では昭和37年に左大文字送り火を地元民の家族とそのシンルイによって支えることを確認し，以後その体制を

習得している。このことが可能になったのは，保存会が古来各家族の子供は準会員，戸主は保存会，その父は不動講，母は尼講というように，それぞれの内的なつながりにもとづいて構成され，（第８章），その緊密な連帯と行政の支援のもとで，準備，割木・護摩木・水塔婆受付，松明行列，点火，御詠歌という行事を，受け手の願いをとり込みながら伝統的に守ってきたことによっている。（第９章）。

もっとも大北山地域は昭和30年頃迄は兼業農家が多く，ほとんど内婚であった。けれども高度経済成長後住民が勤人化することにより外婚化が進んだ。昭和37年に保存会の成員資格をその迄の地元民のみからシンルイに迄ひろげたのは，こうした事情があってのことなのである（第10章）。ところで古来左大文字，舟形が点される山々の麓は蓮台野，鳥居の麓は化野，大文字や妙法の麓は鳥辺野といわれ，いずれも死者を葬る地とされていた。また大文字の大は人の姿を示すとされている。それ故五山送り火は全体的には，他界と京都の町の境にある葬地の上で，死霊の厄をはらい，妙法の力で弔い，舟に乗せて鳥居の彼方の他界に送りとどけるとのコスモロジーにもとづいていると解することが出来るのである。（第11章）。

第三部　通時，共時分析と理論的展開では，左大文字送り火の調査分析をもとに都市人類学の理論構築が試みられている。まず大北山地域の混住化にもかかわらず，左大文字送り火の行事や保好会の組織において，伝統的民俗やその組織基盤が崩壊するどころか，かえって強化されている点に注目する。そしてこれは大北山地域の地元民の間に，この左大文字という彼ら独自のフォークやそれを守り続けてきた保存会に対する愛着やアイデンティティがあったからだとし，このように歴史的，社会的に規定された固有の集団性に対する愛着やアイデンティティを“エスニシティ”と名づけている。その上で従来の都市人類学のように都市の脱フォークの面のみでなく，こうした“エストシティ”にもとづく再フォークの面，さらには両者の併存も検討すべきであるとしている。（第11章）。

ところで大北山地域のような小地域共同態がより大きな都市共同態に終結していく為には，両者を結びつける仲介項や中間集団が必要である。左大文字送り火への行政の支援，また左大文字において長年この行事に貢献し，市長表彰を受けた会員の行事の中核をなす大松明を持たせる営みはこの中介項のあり方を示している。このようにこうした中介項を抽出してその分析を進めることによって，個別の地域協同態の統合態としての都市共同態の把握が可能になるのである（第13章）。なお都市の民俗では，小地域社会内に閉じこめられた民俗が何らかの契機があれば，都市全体さらにはより普遍的なものに展開する可能性を持っている。例えば妙法の送り火は松ケ崎の住民に守られてきた民俗だが，点火後日蓮宗の檀那寺で行われる法華信仰にもとづく題目踊を通してより広域の人々や日蓮宗信者に広がっているのである（第14章）。また今一方で都市の民俗は祭礼などの機会にその時々の風俗を取り入れてより新しいものを生成してしる。それ故こうした都市民俗の生成過程にも注目すべきだとしている（第15章）。

現在の都市祭礼では祭礼を担うのはこれ迄のように地域共同態だけではない。企業，クラブなどのアソシェーションが参加する。そしてこれらが新しい風俗を生み出してもいく，（第16章）。また逆にこれらが伝統的な組織の中に浸透していくものである。例えば東山の大文字では地元家系の家が，それぞれの火床を担当するが，家長の裁量でその家の下宿人，友人などがボランタリーに参加しているのである（第17章）。都市祭礼にあっては実施者は祈る者や見物人の要求を，彼らが自分たちに打ち込んだ楔であるかのように重視してとり入れている。こうしたことから両者の間に共感がうまれている。また祭礼の実施にあっては職業，身分などという社会的区別を一度解体し，これらを送り手（演者・支持者），受け手（祈る者，見る者）に再編し，その上で両者の混融一体のコミュニタスに到っている。その折りには俗なる時には京都の町の周辺であった山々が，聖なる火を点じられることによって人々の視点の中心となるというように逆転がなされているのである（第18章）。

ところでいう迄もなく調査・研究者は祭礼の場になぞらえれば，受け手の見る者である。その際彼らが唯まんべんなく広く見るのでなく，送り手である祭礼などの実施者により深く接し，深い楔を打ち込むことによって，従来の都市人類学のように都市の多様性（広さ）のみでなく，より深い理解が可能になってくるのである（結章）。

ちなみに著者は長年にわたってアフリカの都市研究も行っており，本論文とあわせて，副論文「アフリカ伝統都市の都市人類学――部族伝統とその現代的展開」を提出している。本論文はこのアフリカでの調査に裏打ちされた研究成果でもある。

さて本論文は，冒頭にも述べたように，左大文字送り火の長年にわたる調査と数多くの先行研究文献の渉猟をもとに都市祭礼に焦点を置いて，都市人類学の理論構築

を試みたものである。その際伝統的な都市祭礼をメッセージとしてとらえ，送り手（演ずる者・支える者）と受け手（祈る者・見る者）の相関に焦点を置いて論文を構成するというユニークな見方に立っている。そしてその結果伝統的な都市に於いては従来の都市人類学で言われてきたような脱フォークの動きのみでなく，送り手の側において，“エスニシティ”にもとづく再フォークの動きがあり，行政の支え，実施者が受け手の考えを積極的に受け入れるなどのことを通して，脱フォークと再フォークの相関の中に新しい都市民俗が形成することを解明している。また都市祭礼において地域の送り手集団のみでなく新しいアソシェーション結合が形成することにも注目している。そしてこれらの記述分析にあたって，「取り込み——便乗」「脱フォークと再フォークの併存，拮抗」「都市民度の創造過程」「都市祭礼のアソシェーション結合」など独創的な概念を設定して理論構築を試みた点などに於いて高く評価しうるものを持っている。

もっとも本論文は長年にわたる調査や発表論文をまとめたこともあって，各章の論述に若干の重複が認められる。また具体的な調査日程と調査内容，インフォーマントリストなどが明示されていない。その際20年にわたる長期の調査であったがゆえに，この間における変化についてもふれるべきであったと考えられる。さらに先行論文の引用と立論に若干の牽強不会の感がないでもない。ただし長年にわたって本調査研究にとりくんできた著者の熱意，現地の人との密接な交流にもとづく調査，説得力を持つ論旨展開，構想力はこうした欠点をおぎなって余りあるものと考えられる。以上のような点から著者は本論文によって博士（社会学）（慶應義塾大学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

心理学博士

甲　第 1246 号　トウアゾン，ダニロ

The Neuropsychopharmacological Bases of Reward: A View from the Conditioned Place Preference Paradigm

(強化効果の神経精神薬理学的解析: conditioned place preference 法からの見解)

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学文学部教授　社会学研究科委員　文学博士　渡辺　茂

副査　慶應義塾大学文学部教授　社会学研究科委員　文学博士　佐藤　方哉

副査　実験動物中央研究所　前臨床研究部主任研究員　文学博士　高田　孝二

副査　星薬科大学薬理学教室講師　薬学博士　鈴木　勉

内容の要旨

要　約

本研究においての主たる目的は，中枢興奮薬（メタンフェタミン，コカイン，カフェイン），オピオイドおよびバルビツレート（フェノバルビタール）の強化効果をマウスの conditioned place preference 法を使用し検討することである。加えて，これらの薬物の強化効果におけるドパミン受容体（D_1，D_2）および cyclic AMP の役割を他の薬物（メチルキサンチン類，ハロペリドール，SCH 23390 およびブロムクリプチン）との相互作用を通して検討した。さらには，これらの薬物に対する種差についての検討も合わせて行った。

依存形成薬物の（*m*-アンフェタミン，コカイン，モルヒネ，カフェインおよびペントバリビタール）の強化効果の検討にはマウス，ウズラおよび金魚を使用した。3種の動物におけるすべての実験には，conditioned place preference 法の biased procedure を使用した。本実験においては両区画にそれぞれ 35−65% の preference を示す動物のみを使用した。動物を各群に分け12時間サイクルの明暗条件，21−24°C 室温条件にて飼育した。実験装置は，2つの同サイズのコンパートメントからなるシャトルボックスであり，マウスにおいては平滑な床面で黒色のコンパートメントおよび凹凸の床面で白色のコンパートメント（15×30×15 cm），ウズラにおいては平滑な床面で赤色のコンパートメントおよび凹凸の床面で青色のコンパートメント（44×38×44 cm），金魚においては赤色の水槽および青色の水槽（34×20×20 cm）を使用した。実験装置への適応は各グループごとの両コンパートメントへ1時間行い，次の日それぞれのコンパートメントへ1時間行った。条件付け（place conditioning）は1日1時間とし，生理食塩液および薬物を投与し，6日間にわたって行った。薬物はマウスおよび金魚においては腹腔内に，ウズラは筋肉内にそれぞれ投与した。試験日には薬物，生理食塩液の投与は行わなかった。訓練時に2つのコンパートメントを区切っていた中心の仕切りを取り除き，それぞれ2つのコンパートメントへの滞在時間を手動式ストップウォッチで5分間に